

本研究所は、一九五三年三月発足以来、巻頭に日高が書いた如き趣旨と目的に従って、研究題目を選び、研究活動を行っているが、今日に至るまでの活動状況の概要を、各研究部門別に報告したい。

一、新教育の為の教育哲学の研究

担当 教授 小島 軍造

所長 教授 日高第四郎

講師 讃岐 和家

敗戦を契機として日本人は、全体主義的国家主義の支配から脱して、突如として民主主義を建前とする国に生活することとなった。しかし、それはポツダム宣言の文化的要求事項として我々に課せられたものであって、国民自身の中からおのずから盛り上ったものではない。このような事情にも拘らず、民主主義の理念は日本人の向うべき正しい道を指し示していると思われる。従って、我々はこの理念を我々自身のものとして身につけて行かなければならない。この間の我々の見解については、別掲の「巻頭のことば」(日高)、及び「教

育哲学についての一つの主張」(小島)に詳細に述べたところである。

右のような考慮から、我々は、独り、教育界だけでなく、広く日本今後の生活にとっての急務は、民主主義の精神的根柢の探究であるとの結論に達した。現在はこの問題を取りあげ、日高の統括的配慮の下に、主として小島がこれに当たっている。すでに基礎的研究より進んで、我々の「主張」をまとめる段階に来ているが、今後の研究の方法としては、「巻頭のことば」に指摘されているような「反響委員会」に我々の「主張」を提出し、その反響によって、それを何度も練り直し、漸次より客観的なものを得ようとする態度をとっている。

二、アジアにおける教育の基督教的原理の研究

担当 教授 関屋 光彦

助教授 長(武田)清子

助教授 秋 田 稔

アジア人の間に於て正しいキリスト教的人間形成がなされる為の教育のキリスト教的諸原理の確立が、本部門の窮極目

的なのであるが、その為には、キリスト教が非キリスト教的なアジアの生活、文化、思想殊にその人間観及び歴史と交渉をもつ場合に生起する諸問題の検討討究がなされねばならない。

この課題に進む準備的な段階乃至は先行的な仕事として、本部門では、人間形成という観点から次の三つの関連ある問題を一名づつを以て担当し、共同的にその攻究を進めていく。即ち、

(一) 古典古代の人間観とキリスト教の人間観の歴史的原理的比較研究と、キリスト教に於ける人間形成の聖書的基礎の探究。

(二) 西欧近代思想に於けるキリスト教と世俗 (secular) 思想の關係の研究。

(三) 日本に於ける人間観、歴史観の探究と、キリスト教とアジア的・非キリスト教的思想との關係についての歴史的原理的考察。

右のような建前に基いて進められている研究活動の成果の一部は、本誌に別掲されているが、過去に於ても次の如き発表の機会を持つことが出来た。

(一) プラトンの「エロス」

—その教育的意義について—

一九五三年一月 秋田 稔

(二) 明治時代における臣民教育とキリスト教

—人間形成の課題として—

一九五四年五月 武田 清子

(三) 啓蒙思想の現代的意味

—キリスト教的人間形成の観点より—

一九五四年一〇月 関屋 光彦

(以上全部学内に於て公開発表)

三、国際理解の教育の調査及び研究

担当 講師 高木 とり

国際的視野に立つ人間の育成の必要が痛感されている今日、この研究の持つ意義は大きい。この部門に於ける我々の第一の問題は、小学校、中学校程度の教育に於て、如何にして何処で国際理解を深める教育をするかということである。そのための準備段階として、本研究所では、今日までの日本の教育が国際理解の問題をどのように扱って来たかを、過去の

五十年の修身、公民、国語、地理、歴史及び社会の教科書の調査を通して検討している。之に関連し、過去二カ年、日高、秋田、高木はユネスコ国内委員会の「ユネスコの見地よりする教科書調査」に参画したし、更に日高はユネスコの実験学校の仕事に Supervisor として関係しているなど、ユネスコとは色々の点で協力している。

又本学のAVセンターとの連携の下に、国際理解の教育のためのフィルム・ストリップの製作を考慮中であり、一方、World Friendship Tape という仕事をはじめている。これは録音テープを使って意見、文化等の国際的交換をし、相互の理解と親善を深めようとするものであり、ICUにふさわしい国際的活動の一つであるといつてよいであろう。

この分野の研究は、今後主任研究員の来任を俟って漸次推し進められることが期待される。

四、教育科学の基礎学としての教育心理学及び

教育社会学の研究

この部門は、一九五五年度より研究を開始する。即ち、教育心理学に関しては、教授岡部弥太郎を中心に、教育社会学

関係では、客員教授ゴールドン・ポールの指導下に活動することになっている。

五、視聴覚教育の研究及び実験

—AVセンターの開設—

担当 教授 西本 三十二

教授 ロイ・ウェンガー

ICUのAVセンターは、視聴覚教育についての理論的研究と、視聴覚教具、教材についての実際的研究を併せ行うと共に、その研究を学内及び学外に提供して、ひとり大学教育ばかりでなく、中等教育、初等教育の改善に資することを目的として、一九五三年四月発足した。

西本は、同年八月より四カ月にわたって、米国に於ける視聴覚教育の盛んな二十余の大学を視察し、視聴覚教育用具、教材、文献等を購入して十二月帰国した。其後、テレビジョン・セットをはじめ、視聴覚教育に関する書籍雑誌、フィルム、スライド、映写機、スクリーン、実物投影機、幻灯機、レコード・プレーヤー等の資料が漸次準備され、一〇二号室の外、一一二、一一三、一一四、一一五号室をAV教室として整備した。

こうして一九五四年度よりAVセンターは本格的な活動をはじめた。同年七月、米国オハイオ州立ケンツ大学のAV主任教授ロイ・ウェンガーを迎え、助手二名、技術員一名、書記一名を加えて陣容も一応整った。

教養学部における視聴覚教育講座の開設は、一九五五年度に予定されているが、一九五四年度におけるAVセンターの活動の重点は、専ら学内へのサーヴィスにおかれた。即ち、教養学部各科の講義に視聴覚教具、教材を利用することに、いろいろの角度から協力した。また学生の課外活動に協力したことも少くない。学内諸行事に随時協力する外、学生のAV教具操作講習会、映画会の開催、放送研究会の育成等がその主なものである。

学外へのサーヴィスとしては、センターの保管するフィルム、書籍、雑誌等の貸出しの外、一九五四年八月二十三日から一週間、全国の教員養成の大学および学部の教授を対象として「大学における視聴覚教育講座または講義を如何に組織するか」ということを中心議題として、視聴覚教育研究協議会を開いたことは、特筆すべきことである。

この協議会には、全国四十四の大学から五十六人の参加者

があり、六日間にわたって、わが国およびアメリカの視聴覚教育の現状をつぶさに検討した。そしてその基礎の上に、わが国の大学において開講するにふさわしいと考えられる視聴覚教育二単位コース、四単位コース、実習および設備基準、視聴覚教育振興策の四つの問題についてそれぞれ委員会をつくり、参加者全員が、どれかの委員会に分属して、慎重に研究討議して一応の結論を出し、それを全体討議にかけた上、それぞれの報告書をつくった。

これらの報告書をはじめ、協議会中に行われた講演の速記、十四大学の発表した視聴覚教育コースの内容、資料、参考文献等を編集して、B五版二〇七頁の第一回視聴覚教育研究協議会記録を刊行した。

なお第一回視聴覚教育研究協議会の各場面を写真にとったものをもとにして、五十二コマのフィルム・ストリップに編集し、これに日本語版と英語版の録音解説を添えて、AV的報告をつくったことも、この協議会の成果の一つといえるべきであろう。

六、学生の補導問題の調査と研究

担当 教授 守谷 英次

教授 小島 軍造(兼)

大学に於ける学生の生活を、学問研究と云う特殊な立場から許りでなく、学生の全人的育成という広い立場から考えることが、終戦後特に緊急な問題となって来た。学生の補導は、戦後の複雑なる学生の実体に常に科学的考察を加えると共に、秀れたる人間的叡智と更に豊かなる愛情とをもって当ることが必要である。

本研究所に於ては、日本の学生の戦前、戦中に於ける事情特に戦後に於ける複雑なる問題を、出来るだけ具体的なる材料を蒐集しつつ学生生活に関する深い知識と広い経験とを動員して究明し、現下学生教育に於て最も困難とされている「如何にして学生問題を解決するか」の方向に力をいたそうとするものである。

次にこの部門に於ける研究項目を類別してみよう。

- (一) 学生運動(学生の自治活動)
- (二) 学生の厚生問題、殊にその経済的援助
- (三) 学生の健康管理
- (四) 学生の宿舎(寄宿舎を含む)

(五) 学生の助言とその制度

(六) 学生の就職問題

(七) 学生の課外活動(スポーツ、文化活動等)

(八) 入学試験

尚これ等の研究項目は一定不動のものではなく、学生生活の実質的内容に応じて随時拡充し、分化し、常に現実的なる学生補導を目指しつつ、他方科学的研究と相俟って学生補導の体系樹立を目指すものである。

このうち(一)については、一九五四年春、小島、守谷によって研究報告がなされ、小島は主として学生運動の特性とその思想的背景とを分析説明し、守谷はこの運動の実際的経過を中心として報告した。

現在、本研究所に於ては、右の諸項目のうち特に(一)及び(二)について調査を進めている。何れその結果は時期を俟って発表する予定である。又、この部門の研究員もそのうちに増加するものと思うので、それと相俟ってその他の研究項目も次第に調査研究を進めたい。尤も、第三以下の諸項目についても現在日本の学生の実態調査という観点から常に目を放すことなく出来得る限り研究調査を続けるつもりであ

る。そのためには常に文部省その他学外の諸機関との連絡を
も密にして具体的なる資料の蒐集に努め、出来得る限り正確
なる学生の実態把握に資するつもりである。

× ×

右が研究題目に即した研究所の研究活動の概要報告である
が、この外、研究と奉仕という二つの機能をはたすために、
安部能成、山本敏夫、谷昌恒、ポール・ウィース、岡部弥太
郎、ジョン・ハウズ等の諸氏をはじめ多くの学外の士を迎え
てしばしば研究会懇談会等を行い、又、「万人の糧」なる名
の下に、我々の目指す真に自由にして責任を重んずる人間形
成への一助ともなるべき意義深い資料の最も簡易な形式によ
る印刷頒布をも行って来た。

今日までに頒布された「万人の糧」は次の如きものであ

る。

A.No. 1 混沌のうちに立ちて 安部 能成

一九五四年五月

A.No. 2 新制大学の特徴 森戸 辰男

一九五四年八月

A.No. 3 学生運動の本質 森戸 辰男

一九五四年十月

B.No. 1 The Christian University and its Impor-

tance for Japan, by Dr. Emil Brunner

一九五五年二月

B.No. 2 Abraham Lincoln's Two Addresses

一九五五年三月

(秋田記)